

白売ったもん（北淡町富島）

むかし、淡路のある港町を、船着場のほうに向かって歩いている一人の商人があった。

「島でのあきないも、うまくいったし、そろそろ、家族の待っている尾張〈おわり〉の町（今の名古屋）へ帰るとしようか。でも、のどがかわいたなあ。」夏の日だったのでのどがかわいてしょうがない。ちょうど通りすがりの町並の軒下〈のきした〉で、お米をついているおばあさんに、「えらいせいが出ますなあ、おばあさん、すまんけど水を一杯くれまへんかいなあ。」

「へい、へい、お水ですか、おやすいご用で…。」

とさっそく、水をくんできて商人と世間ばなしを始めた。そのうち、おばあさんが米をついていたウスをみた商人が、「おばあさん、そのウスをゆずってくれんかなあ。」

「こんなウスなんてほしいんや。」

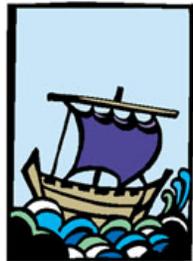
「うちの亡くなった〈なくなった〉おふくろを思い出してなあ、そのウスが、うちにあったウスに、よう似とるんや、どうや十貫銅で売ってくれまへんか。」

「へー、そんな高い値で買うて〈こうて〉くれるんか。」

おばあさんは、こんなしょうもないウスを、そんな大金で買ってくれるというので、よろこんで売ることにした。十貫あれば、こんなウスをいくつも買える値段なのでほんとうにうれしかった。

「どうぞ、もっていきなされ、そこらにいる若い衆に船着場まで運ばさせるさかいに。」こうして、おばあさんからウスを買った商人は、なぜか、宝物でも手に入れたように、にこにこしながら、運ばれたウスと共に船に乗りこんだ。

一方、おばあさんは、野良仕事から帰った息子夫婦と共に、「せめて、あんなウスを大金で買ってくれたお礼に、お見送りしよう。」と三人で船着場へやってきた。商人は、びっくりして、「さては、このウスをとりもどしにきたのか。」そう思って船頭に、金をいくら与えて、「すまんけど、はよ船を出してくれ。」とせきたてた。船が沖へ出て、船着場の三人の姿が小さくなると、商人は、ほっとして、満足したように、にこにこしながら、船頭に、話し始めた。



「このウスはな、伽羅〈きやら〉という木で作ったもんでな、京都へもっていったら、何千貫もの高い値で売れるんじゃ、あのおばあさん、何も知らんと、十貫で売ってくれよった。」「そら、よかったですなあ、そんなら、あの三人、船着場へ、このウスをとりもどしにきよったんですかいなあ。」「そうやろ、でも、もうおそいわ。」商人は、大きな声で笑った。

その後、船頭の口から淡路中にこの話が伝わり、おばあさんや息子夫婦は、くやしだったが、あとの祭りになってしまった。

今でも、淡路の一部では、「うす売ったもん」ということばは、「何も知らんやつ」という意味につかわれている。